

レファレンスカウンター非設置の背景についての考察 —愛媛県・広島県の公共図書館の比較から—

松本 美琴

文部科学省の提示する『これからの図書館像』においてレファレンスサービスの充実が提案されている。一方、レファレンスサービスが活発に行われているのは一部の館に留まっていると、この報告書の著者の一人である薬袋（2005→2007）は講演において述べた。こうした現状の中で、図書館におけるレファレンスサービス自体を知らない利用者も多くいると考えられる。レファレンスサービスのPRが重要とされる現在、レファレンスサービスの存在を周知する手段としてレファレンスカウンターに着目した。

そこで本研究では、愛媛県と広島県の2県を例として、県内の市町村立図書館にレファレンスカウンターがどの程度設置されているのかを調査し、その設置を決める背景にどのような要素があるのかを明らかにすることを目的とした。対象としてこの2県を選択した理由は、「瀬戸内しまのわ2014」等の共同企画を現在でも開催するように非常に関係が深い2県だからである。一方で、広島県は愛媛県よりも財政規模や人口も多く、また、昔から教育学の拠点であるとされてきた広島大学の存在など教育文化的にも差があるように思われた。そこで、自治体の規模や財政状況が、その自治体の公共図書館にレファレンスカウンターが設置されているか否かに関係していることを仮説として設定した。また、レファレンスカウンターを廃止した館についてもその要因を開かれた仮説として提示し、明らかにしようと考えていたが、そういった館は調査対象の中に見られなかった。

研究方法としては、まず対象を2県全ての市町村立中央図書館39館として、レファレンスカウンターを設置しているか否かやその設置年、レファレンス件数、その内容等についての質問紙調査を行った。次に、回答のあった29館についての図書館決算や奉仕人口、その館が所属する市町村の決算や面積等のデータを文献から得た。これらと質問紙調査から得られた各館のレファレンスカウンターの設置の有無等との相関関係を求めた。

結果として、レファレンスカウンターを設置している館と設置していない館を比較すると、一人あたりのレファレンス件数との間に関係を見ることが出来た。しかし、図書館決算や市町村決算、奉仕人口との間に関係を見ることはできなかった。また、一人あたりのレファレンス件数については図書館決算や市町村決算との間に相関が見られた。なお、各県立図書館と県の教育委員会生涯学習課にインタビュー調査を実施し、市町村立図書館についてどの程度状況を把握しているか尋ねたところ、ともに財政や人員・連携しているサービスの情報は把握しているが、レファレンスカウンターの設置非設置の現状等については把握していないとの回答であった。これらのことから、レファレンスカウンターの設置有無には一人あたりのレファレンス件数が、またレファレンスサービスの実施件数の多寡には、市町村や図書館の財政的要因が介在している可能性がそれぞれ示唆された。

(指導教員 後藤嘉宏)